

愛媛県越智郡魚島村韓国漁出之状況 明治四十四年五月



第121回歴博フォーラム

境界を往来した人びと



日時

令和7年

8月2日(土) 12:30 ~ 16:30

会場

国立歴史民俗博物館 講堂

第121回歴博フォーラム

境界を往来した人びと

日 時：令和7年8月2日(土)12:30～16:30

会 場：国立歴史民俗博物館 講堂

プログラム

- 12:30～12:35 開会挨拶 西谷 大(国立歴史民俗博物館・館長)
- 12:35～12:50 リニューアル趣旨説明 大串 潤児(国立歴史民俗博物館・歴史研究系・教授)
- 12:50～13:00 フォーラム趣旨説明 吉井 文美(国立歴史民俗博物館・歴史研究系・准教授)
- 13:00～14:00 基調講演：「留学を通してみる近代の日中・米中関係―越境と文化」
村田 雄二郎(同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科・教授)
- 14:00～14:15 休憩
- 14:15～14:30 コメント：海を渡った日本の漁師―明治期の朝鮮への出漁
松田 睦彦(国立歴史民俗博物館・民俗研究系・教授)
- 14:30～14:45 コメント：〈帝国〉日本の修学旅行
樋浦 郷子(国立歴史民俗博物館・研究部・准教授)
- 14:45～15:00 コメント：平岡ダムの建設と満島捕虜収容所―地域史の観点から
原 英章(飯田市歴史研究所・調査研究員)
- 15:00～15:15 休憩
- 15:15～16:25 パネル・ディスカッション
- 16:25～16:30 閉会挨拶

総合司会

吉井 文美(国立歴史民俗博物館・歴史研究系・准教授)

開催にあたって

吉井 文美(国立歴史民俗博物館)

本フォーラムは、現在、進められている総合展示第5室「近代」の展示リニューアル(2026年3月17日開室予定)と連動して開催するものです。

新しい展示では、「〈国民〉の誕生」「近代化する人びとのくらしと仕事」「〈帝国〉日本の社会と人びと」という、3つの大きなテーマを設定しています。今回のフォーラムでは、このうち「〈帝国〉日本の社会と人びと」のテーマで予定されている展示の内容や、今回のリニューアル全体のねらいと関わらせながら、近代という時代のなかで展開される、人びとの移動とその意味について考えます。

近代に日本が形成した〈帝国〉は、さまざまな人びとや社会、文化によって成り立っていました。また、帝国を構成する地域や、近隣の国々とのせめぎ合いや協調・対立のなかで、日本の近代の歴史は重ねられてきました。東アジア世界における複合的かつ多元的な関係性のなかで、近代の歴史をどのようにとらえるのかについて、これまで当館では議論を重ねてきました。本フォーラムでも、さまざまな資料に基づきながら、多角的に東アジアの近代を考えてみたいと思います。

今回は「境界を往来した人びと」に着目します。近代になると、新しくいくつもの境界が作られました。境界はその形態や性質をしばしば変化させながら、人びとの暮らしに大きな影響を及ぼしました。多くの人びとが境界を行き来するなかには、主体的な移動のほか強制的な移動もあり、個人の主体的な移動であっても、それは〈帝国〉の影響とは無縁ではない側面もみられました。人びとはどのような境界を越え、その先でいかなる世界を目にしたのでしょうか。人びとの経験から歴史の断層を見てみましょう。

本フォーラムで登壇するのは次の方々です。

村田雄二郎氏(基調講演)は、近代中国のアメリカ留学と日本留学の経験をテーマに、留学という文化の越境行為の意味を考えます。近代の留学は、広く知識や文明を国外に学び、それを吸収消化して自国あるいは植民地の近代化を推し進める通路となったばかりでなく、文明化の現状・内実に対する懐疑や批判を生み出す契機にもなりました。いまの私たちにとっても身近な留学という行為を通して、近代における東アジアの国際交流史を再考します。

松田睦彦氏(コメント)は、明治期に日本から朝鮮へ出漁した人びとの事例を通して、人びとが越境した背景やその意味、それが現代にまでもたらしている影響について紹介します。

樋浦郷子氏(コメント)は、近代における修学旅行、とくに朝鮮から内地への修学旅行と、満洲(中国東北部)から朝鮮への修学旅行の事例から、生徒たちの〈帝国〉体験について紹介します。

原英章氏(コメント)は、アジア太平洋戦争期に朝鮮人・連合軍捕虜・中国人の強制労働の場となった平岡ダムの事例から、地域の人びとが戦時中の歴史をどのように受け止めてきたのかを紹介します。

本フォーラムが、世界史のなかの日本の近代を考えるきっかけになるとともに、新しい展示の方法や視点、展示に込められたねらいについて理解を深めていただく機会になることを期待します。

登壇者の紹介

むら た ゆう じ ろう
村田 雄二郎

同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科・教授

『清末中国と日本—宮廷・変法・革命』(孔祥吉と共著)、研文出版、2011年

『語言・民族・国家・歴史—村田雄二郎中国研究文集』重慶出版社、2020年

『アジア人物史 第8巻 アジアのかたちの完成』(編著)、集英社、2022年

まつ だ むつ ひ こ
松田 睦彦

国立歴史民俗博物館・民俗研究系・教授

『人の移動の民俗学—タビ〈旅〉から見た生業と故郷』慶友社、2012年

『昆布とミヨク—潮香るくらしの日韓比較文化誌』(図録)、国立歴史民俗博物館、2020年

『外交文書に見る朝鮮海通漁の成立』『国立歴史民俗博物館研究報告』239、国立歴史民俗博物館、2023年

ひ う ら さ と こ
樋浦 郷子

国立歴史民俗博物館・研究部・准教授

『神社・学校・植民地 逆機能する朝鮮支配』京都大学学術出版会、2013年

YouTube講演：「意図した断絶と意図せざる継承について—1945年の台湾と朝鮮における学校文書から」京都大学教育学研究科 2020レクチャーシリーズ「越境する「日本型教育」の歴史的・多角的理解に向けて」2020年8月29日(2020年12月17日以降公開)

「『厳粛』な帝国—学校における天皇・皇室崇敬」駒込武・高木博志編『国家神道の現代史』第五章、東京大学出版会、2025年(印刷中)

は ら ひ で あ き
原 英章

飯田市歴史研究所・調査研究員

平岡ダムの歴史を残す会代表

『本土決戦と外国人強制労働』(共著)、高文研、2023年

『捕虜収容所・民間人抑留所事典 日本国内編』(共著)、すいれん舎、2023年

おおぐし じゅん じ
大串 潤児

国立歴史民俗博物館・歴史研究系・教授

『「銃後」の民衆経験—地域における翼賛運動』岩波書店、2016年

『国策紙芝居—地域への視点・植民地の経験』(編)、御茶の水書房、2022年

『精選 日本史探究』(共著)、実教出版、2023年

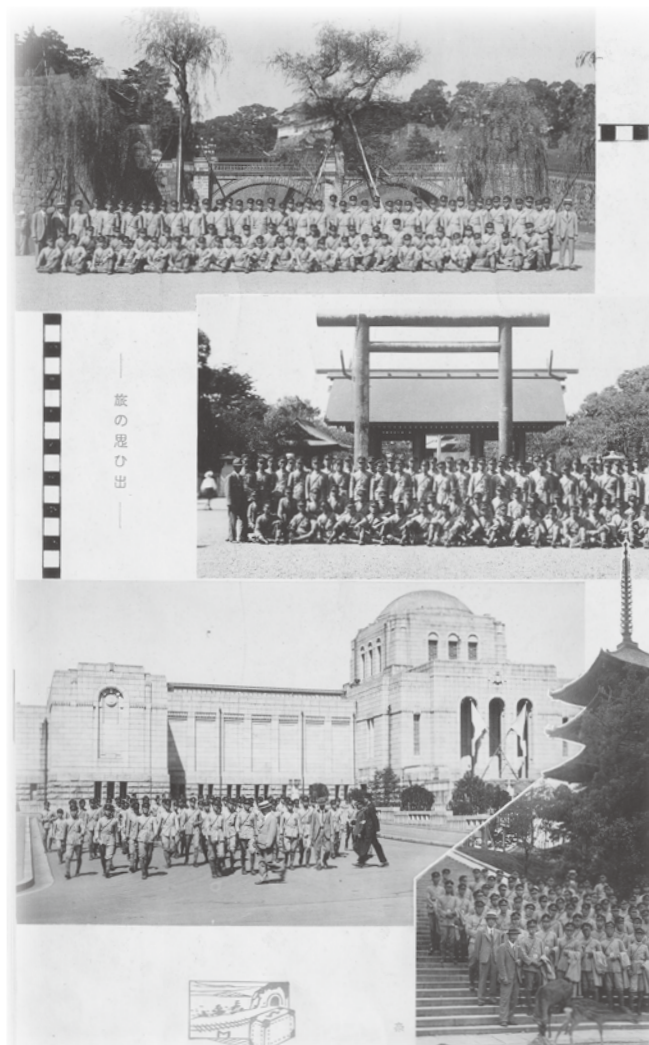
よし い ふ み
吉井 文美

国立歴史民俗博物館・歴史研究系・准教授

『日本植民地研究の論点』(共著)、岩波書店、2018年

『論点・日本史学』(共著)、ミネルヴァ書房、2022年

『日本の中国占領地支配—イギリス権益との攻防と在来秩序』名古屋大学出版会、2024年



「留学を通してみる近代の日中・米中関係―越境と文化」

村田 雄二郎(同志社大学)

はじめに

本報告では、全体テーマである「境界を往来した人びと」の事例として、19世紀後半から20世紀前半の時期にアメリカ合衆国と日本に渡った中国人留学生を取り上げる。

近代における人の移動は、蒸気船や通信などテクノロジーの発達を背景に飛躍的に拡大する。東アジアにおいて、それはアメリカ大陸に出稼ぎにゆく中国人労働者の太平洋をまたぐ広域移民で幕を開けた。さらに19世紀末になると、国境の確定や近代日本の帝国化などをふまえて「越境」する人々の多彩な活動が、東アジアの政治や経済社会を大きく動かしていくことになる。

一例を挙げれば、帝国日本に留学した台湾人留学生の自治要求がある。これは第一次大戦後、大正デモクラシーの風潮に影響され、台湾総督に立法権がある現状を改め、台湾に民の声を代弁する議会を設置するよう帝国政府に求めたものである。台湾議会設置請願運動はやがて文化啓蒙を目的に台北で発足した台湾文化協会の活動と結びつき、台湾の民族運動の基軸となっていった(十数回に及ぶ請願は帝国議会で一度も採択されず、運動は挫折した。)

このように近代の留学は、広く知識や文明を国外に学び、それを吸収消化して自国あるいは植民地の近代化を推し進める通路となったばかりでなく、文明化の現状・内実に対する懐疑や批判を生み出す契機にもなった。その意味で、留学は文明・帝国の中心に向かう一方向的な流れではなく、異地域・異文化を越境しつつ多方向に展開するダイナミックな運動となる。本報告では、近代中国のアメリカ留学と日本留学の経験から、留学という文化の越境行為の意味を改めて考えてみたい。

1. 近代中国とアメリカ留学

清朝(1644-1912)中国がはじめて留学生の派遣先を選んだのは、アメリカ合衆国である。1860年代に始まる洋務(自強)運動の一環として、1870年代に5回、合計120名の少年(すべて男性)がニューイングランドに送られた。この留学計画を早くに清朝政府に提案したのは、初代駐華公使をつとめたアンソン・バーリングゲーム(Anson Burlingame、1820-70、漢名・蒲安臣)である。バーリングゲームは、中国は文明国家ではあるが、伝統的価値に固執する保守勢力も強いので、外国は中国が徐々に自己改革を進める手助けをし、その国際社会への参入を促すべきだという、開かれた理想主義の持ち主であった。1868-70年には中国初の欧米使節団を率いて欧米諸国を周遊し、訪問先のロシアで逝去した。国際法を学ぶよう清朝に建言したのも彼であり、清朝がそれを容れて刊行した漢訳『万国公



サンフランシスコに到着した中国人留学生(1872年)
出典: Thomas La Fargue Papers (cg255b02f01n05), Washington State University Libraries' MASC

法』(1864年刊)は中国のみならず、日本にも将来・翻刻され、幕末明治期の志士の西洋理解にも大きな影響を与えた。

その後、留学生派遣を具現化したのは、容闳(Wing Yung、1928-1912)という広東人である。彼は孫文とは同郷(世代的には一つ上)で、マカオと香港で初中等教育を受けた後、1847年にアメリカに留学、エール大学を卒業した。アメリカの大学で初めて学位を得た中国人とされる。1854年に帰国し、上海税関の通訳や外国商社で働いた後、63年に当時の実力者・曾国藩の幕僚となり、洋務運動に関わるようになった。この間、中国南部を支配した太平天国の首都・南京を訪問するなど、多彩な動きを見せている。ただ、容闳は科挙の上昇ルートから外れていたため、中国の社会では終始「周縁人」として生きざるをえなかった。

ともあれ、彼の熱心な説得が功を奏して、アメリカへの留学生派遣は曾国藩を継いだ李鴻章に認可され実現した。容闳本人も留学生(12-16歳の少年)とともに渡米し、駐米副公使の身分で、当時外交懸案となっていた「華工」虐待問題の調査のためペルーに赴き、報告書を提出するなど活発に動いた。だが、容闳が苦勞しながら世話したこの留学事業は国内の保守層の反対で、わずか4年で中断する。中国はまだ科挙全盛の時代であり、留学に価値を認める環境にはなかったからである。

アメリカへの留学生派遣が再開するのは、1910年のことである。この年、1901年に課せられた義和団賠償金を中国の文化・教育事業に還元するため、北京で留学予備学校・清華学堂(現・清華大学)が設立された。その間、30年の空白があった。清華学校からアメリカに留学した若き学徒は、学術文化界のスーパースターとなる胡適(1891-1962)など、その後の中国の政治や経済、文化や学術を支える人材の柱となる。

2. 近代中国の日本留学

中国の日本留学は、日清戦争後に始まる。1896年に浙江省から官費留学生を送られたのを皮切りに、1901年に留学奨励策が打ち出されると、各省は有為の若者を選抜して日本に送った。浙江省紹興の出身で、南京の鉄道学校から日本への留学を決めた魯迅(1881-1936、本名周樹人)もそうした官費留学生の一人である。魯迅はまず日本語や基礎科目を東京の弘文学院(嘉納治五郎が設立)で学び、仙台医学専門学校(現・東北大学医学部)に進学したが、思うところあって医学を捨てて文学の道に進み、弟の周作人らと東京で翻訳文学雑誌の発行に関わった。しかしこの試みはうまくいかず、彼は1909年に帰国、辛亥革命後は北京で教育部の役人になった。彼が小説など創作をはじめるのは、五四新文化運動の時期である。

官費留学生が増えるにしたがい、パスポートやビザ、入学許可証もいらなかった事情もあって、私費留学生も増大していった。そのピークは日露戦後で、1905-06年には1万人近い中国人留学生が、日本の予備校や専門学校・大学などで学んだとされる。日本が留学先に選ばれた理由は、「安・近・短」一すなわち、経費が安く、地理的に近く、



実践女学校卒業の湖南留学生(1906年7月)

出典：故下田校長先生伝記編集所編『下田歌子先生伝』(故下田校長先生伝記編集所、1943年)

学修期間も短いとされたからである。日本側は、東京を中心に予備学校(先の弘文書院など)を開き、また早稲田大学の清国留学生部や明治大学の経緯学堂など、清国留学生を受け入れる組織を特設したり、また法政大学では修業年限の短い速成コースを設けたりした。女性の留学も盛んになり、下田歌子が創設した実践女学校では1911年までに100名ほどの清国留学生が卒業した。日本で革命家となり、1907年の帰国時に謀叛の嫌で逮捕処刑された秋瑾^{しゅうきん}もその一人である。秋瑾は魯迅と同郷であり、魯迅の小説「薬」(1919年)は秋瑾をモデルにし、その刑死を描いたものとされる。ほかに軍人を目指す若者も少なくなかった。参謀本部下の留学生向け教育機関である振武学校には閻錫山^{えんしやくざん}・蒋介石・張群・何応欽ら中華民国期に活躍する軍人が入学した。

留学生が急増し、学校の寄宿舎が不足するようになると、学校に近い早稲田牛込町や神田三崎町の下宿屋に住む学生が増えていった。生活習慣の違いや日本語の学習困難に加え、木造家屋での畳に布団の暮らし、隣室との薄い壁に慣れず、まかないの食事も口に合わないといった理由で苦勞するものも多く、学業を途中で放棄するものもいた。また、転学や二重学籍の状況も少なくなかった。1905年に日本の文部省が「清国留学生取締規則」を公布すると、中国人留学生の間には激しい反対運動が巻き起こるが、その背景には、増大する留学生への対応策として、学生管理を見直すという意味合いがあった。他方、「取締規則」反対運動をテコとして、留学生の間には清朝打倒の「革命」に共鳴する流れが加速する。亡命中の革命家(孫文や黄興)を中心に東京の赤坂靈南町(いまのオークラ東京敷地内)で結成された中国同盟会には多くの留学生も参加し、東京はさながら中国革命の一大「亡命基地」兼「革命策源地」となっていった。

3. 大正・昭和初期の中国人留学生

大正の始まりと中華民国のはじまりはほぼ重なる。辛亥革命前後に、多くの中国人留学生は帰国し、その数は一時2000人を下回るに至る。また、第一次大戦中の1915年に日本が提出した21か条要求は多くの中国人の感情を損ない、「反日」的風潮が中国社会を覆いはじめる。しかし、それでも日本留学を志す若者がいなくなったわけでない。また、日本側としても、中日「親善」促進のために、中国からの留学を積極的に奨励する必要があった。1910年代から満洲事変が起こる1931年まで、年によって変動はあるが、中国人留学生は概ね毎年2000～3000人の間で推移した(これは同時代のアメリカへの留学生総数の約2倍である)。

海外留学といえば、アメリカが主要な目的国となるなか、日本の対中政策の変化や中国の社会情勢の変動などを背景に、中国人の日本留学の動機・目的や留学先・留学形態も変化してゆく。一つの転機は、大正教養主義の影響や「五高特約」(第一高等学校など5校に設けられた帝国大学への進学特別枠。1908年に始まり、25年には「特設予科」に拡大)締結があって、留学生の質の向上や専門家の育成に力が注がれたことである。この変化の特徴を明治(清末)期と対比してみたのが、右の表である。もちろん、留学生といっても一括りにできるわけではなく、あくまで一部の傾向を抽出した概括的な比較に過ぎない。数から言えば、半

数以上は私立大学在学中で、旧制高校～帝国大学組は全体の1割程度であったと推察される。とはいえ、この表から留学傾向の一つの変化を見ることはできよう。

特筆すべきは、旧制高校で教養教育を受け、さらに帝国大学で医学や工学などを学んだ留学生たちが文学

清末と民初の留学生

時期	清末(明治)期	民初(大正)期
目的	政治(革命・立意)	文化(学術)
留学形態	別科・短期	正規・長期
入学先	速成科・留学生部	旧制高校～帝国大学
学習内容	新学/西学/東学	教養・専門
日本社会との関係	隔絶	適応・同化

結社や學術団体を結成し、爾後の中国での活動につながる多くの成果を上げたことである。とくに有名なものには、自然科学系中心の中華学芸社(1916年成立)と文学結社の創造社(1921年成立)がある。後者は、郭沫若・郁達夫・成仿吾・田漢(中華人民共和国国歌の作詞者)・張資平ら、その後中国で活躍する文学者・芸術家の集まりとして、中国現代文学史上、輝かしい足跡を記している。これに、魯迅・周作人兄弟を加えるならば、清末から民国初期にかけて日本に留学した若い中国人は、日本という場所で、日本語や日本で学んだ欧米諸語を通して、外国の近代文学や日本の古典・近代文学を存分に吸収咀嚼し、自らの創作や評論の栄養源としていったのである。その意味で、日本は中国の現代文学史において欠かすことのできない揺籃の地であり、また自由で開放的な活動空間だったのである。

4. 左翼思想の源泉としての日本

これに併せて見逃すことができないのは、中国の留学生にとって、勃興したはじめたプロレタリア文芸や左翼思想が理論・実践の両面で大きな魅力となっていたことである。国内では1924年から国共合作による「革命」の時代に突入していた。革命に感化されて左傾する青年たちは、その表現を求めて文学や芸術を志向するものも少なくなかった。発足当初ロマン主義的色彩を帯びていた創造社のメンバーのなかにも、1925年頃から革命文学(プロ文学)を唱える下の世代があらわれてきた。プロ文学の流行には、日本語による蔵原惟人^{くらはらこれひと}らの文学理論の紹介などが大きく貢献した。文学だけではない。経済学や社会学に興味を持つ留学生のなかには、マルクス主義文献などに触れて左傾してゆくものが少なくなかった。京都大学の河上肇は当時の中国左傾青年にとってあこがれの的であり、多くの留学生や訪問者が集まった。先の中華学芸社の創立メンバーであった陳啓修(1886-1960)は1930年に東京で日本語訳を底本とし、ドイツ語版を参照しつつ、中国最初の『資本論』翻訳を行った経済学者である。また、コミンテルン27年テーゼへの対応や日本資本主義の性格をめぐる論争は、同時期に中国で展開された中国社会史論戦にも理論面で影響を及ぼした。このように、1920年代の日本は中国の左翼思想やプロレタリア文芸にとって、モスクワやベルリンにも劣らぬ知の源泉になったのである。

だが、そうした状況は1931年の満洲事変の勃発を機に大きく変化する。帰国する留学生が急増し、中国の日本留学熱は冷え込んだ。追い打ちをかけるように、日本国内では共産党弾圧が苛烈になり、左翼思想が結ぶ両国の人的・思想的つながりはやせ細っていた。ただ、留学生全体の数を見ると、32年からは増加する傾向を見せ、日中開戦前の36年には約6000人に回復している。これには、満洲建国や華北分離問題で揺れた両国関係が外交レベルで一旦沈静化したことが大きく作用している。また、日本の外務省が主導する「東方文化事業」(由来は1923年発足の「対支文化事業」)が留学生への学費補給制度を講じたことや1932年に別立てで「対満文化事業」を起動したことも、留学生の増加につながった。満洲建国とともに、「満洲国留学生」が積極的に呼び寄せられたのである。1937年6月時点の統計では、中華民国留学生が3995人、満洲国留学生が1939人、合計5934人となっている。

おわりに

以上、時間の関係で、1937年の日中開戦以前で話を終えざるをえなかったが、戦争中もアメリカ、日本への留学は小規模ながら続く。日本留学について言えば、第一のピークは20世紀初頭、第二のピークは1936年、そして第三のピークは改革開放期の1980年代以降となるだろう。俗にアメリカ留学は金、西欧留学は銀、日本留学は銅、と言われる。一面の真理ではある。だが、文学や社会科学の受容、和漢洋の教養体得という面で見ると、近現代中国にとって日本留学はそうしたランク付けに収まらぬ、精神の内奥に及ぶ意義をもつ経験だった。魯迅の例が示すように、日本留学を通じて、中国知識人の精神世界は大きく揺さぶられたのである。

海を渡った日本の漁師—明治期の朝鮮への出漁

松田 睦彦(国立歴史民俗博物館)

はじめに—現代韓国の日常と日本

韓国のスーパーの鮮魚売り場や伝統市場の鮮魚店の品ぞろえをのぞくと、韓国で伝統的に好まれてきたグチやマダラ、スケソウダラ、ニシンなどに交じって、近代以降に広く食べられるようになったサワラやサバ、タチウオなどの魚が見られる(写真1)。近代以降の朝鮮半島の文化や技術の変容に日本が深くかかわっていることは周知の事実だが、現代の韓国の人びとが日常的に食べる魚の種類にもその影響は及んでいる。

1945年の日本の敗戦と朝鮮半島からの日本人の引揚げ以前、多くの日本の漁民が朝鮮半島に渡って漁をしていた。日本の漁民が朝鮮半島近海でどのような魚介類をどのような技術で漁獲したかは時代ごとの需要に応じて変化したが、そうした変化は日本人ばかりでなく、現地、朝鮮の人びとの生産活動や食文化にも影響を与え、今日に至るのである。

本コメントでは、日本の漁民の朝鮮半島への出漁の経緯を示したうえで、なぜ彼らが朝鮮を目指したか、その理由について考えてみたい。



写真1 ソウル市の伝統市場の鮮魚店

1. 日本人漁民による朝鮮への出漁

日本漁民の朝鮮への出漁の記録は、15世紀の全羅南道巨文島や慶尚南道沿岸への出漁にさかのぼる。また、対馬では中世段階より他領からの出漁が確認されるが、16世紀末から18世紀にかけての停滞を経て19世紀初頭に再び活発化したタイ、ブリ、イカ等を求めた瀬戸内漁民の対馬への出漁が、監視の目をかいくぐりながら魚影の濃い朝鮮半島沿岸にまで及んでいたことが知られている。近代に入ると、1877(明治10)年頃にはすでに九州や瀬戸内海の漁師による朝鮮への出漁がおこなわれているが、その背景には、こうした近世以来の出漁の実績があると考えられる。

明治に入ってからの出漁は、はじめはブリやサバ、タイなどの釣りを目的としたものが多かったが、次第にフカの延縄に移行する漁民があらわれる。また、あらたに導入された器械潜水では、ナマコやアワビがおもな漁獲対象であった。いずれも近世の俵物に相当する海産物であり、幕府による統制が解除されたことによる対清貿易の盛況を反映している(写真2)。

その後、1890年代にはサワラ、サバ、カタクチイワシ、スケソウダラ、グチなどの網

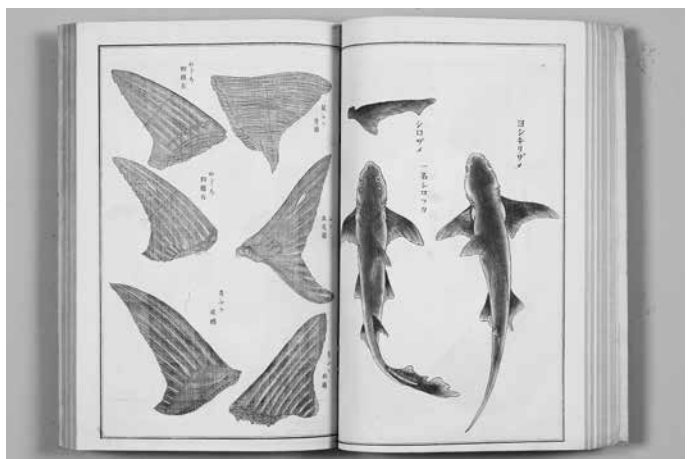


写真2 河原田盛美1886『清国輸出日本水産図説』の「鰺鰯の説」

漁がおこなわれるようになるが、これは朝鮮半島沿岸の漁場開発や出漁漁民の多様化、朝鮮国内における流通体制の整備などのさまざまな要因によると考えられる。

こうした初期の朝鮮への出漁は、目的とする魚種の漁期だけ朝鮮におもむく通漁の形であった。しかし、朝鮮における日本の影響力の拡大や日露戦争による軍用食料の需要増加によって、しだいに朝鮮に定住する漁民が増加し、日本人の集住する漁村や町が形成される。さらに、韓国併合による在朝日本人の増加や軍隊向けの食料の確保、化学工業の発展といった時代背景や漁業技術の進歩のもと、日本人による朝鮮での漁業は拡大し、1945年をむかえることとなる。

2. 後手にまわる規則の整備

朝鮮半島沿岸への日本人漁民の入漁が正式に認められたのは1883(明治16)年に日朝間で結ばれた「朝鮮国ニ於テ日本人民貿易ノ規則」においてである。漁業にかかわる項目は全42款からなる日朝間の貿易に関する取り決めの第41款におさめられており、その内容は以下の3点にまとめられる。

- ①日本漁船には朝鮮の全羅・慶尚・江原・咸鏡の4道沿岸での漁を、朝鮮漁船には肥前・筑前・長門の朝鮮側および石見・出雲・対馬沿岸での漁を認める。
- ②上記地域での私貿易は認めず、違反した場合には品物を没収する。ただし、漁獲の販売は許可する。
- ③魚税やその他詳細については、本規則を2年間運用したのちに、時の状況に応じて協議する。

こうした内容は、前年に清との間で締結された「朝清商民水陸貿易章程」とほぼ一致しており、日朝両政府の思惑の交錯を読み取ることができる。

一方、「貿易規則」の2年間の運用の後に定めるとされた魚税については、1889(明治22)年の「日本朝鮮両国通漁規則」の締結を待たなければならない。この「通漁規則」では、「貿易規則」第41款の内容が踏襲されるとともに、乗組員数に応じて三段階で漁業税が定められ、取り決めに違反した者への処罰についても記されている。ただし、日本で違反をした朝鮮漁民は現地の地方裁判所で裁かれるのに対し、朝鮮で違反をした日本漁民については朝鮮の地方官が日本領事館に告訴することになっており、1876(明治9)年の「日朝修好条規」で定められた領事裁判権が再確認されている(写真3)。

こうした漁業をめぐる1880年代の動きは、明らかに日本漁民の活動に後れを取っている。日本漁民の朝鮮への出漁が先にあり、日朝の外交関係をにらみながら、後追いで制度が定められたのである。「貿易規則」以前の日本漁民の朝鮮半島沿岸での漁は、密漁だったことになる。

3. 日本人漁民と現地住民の関係

1883年に「貿易規則」と同時に朝鮮と日本が締結した規則がある。「朝鮮国海岸ニ於テ犯罪ノ日本国漁民取扱規則」である。これは「日朝修好条規」で定められた領事裁判権を基礎として、罪を犯した日本の漁民を朝鮮の官吏が取り押さえ、証拠を添えて事故なくその身柄を最寄りの開港場の日本領事館に護送することなどを定めたものである。

釣りを主体とした初期の出漁は、対馬で水や食料、釣り餌、漁獲保存用の塩などの補給をしていた

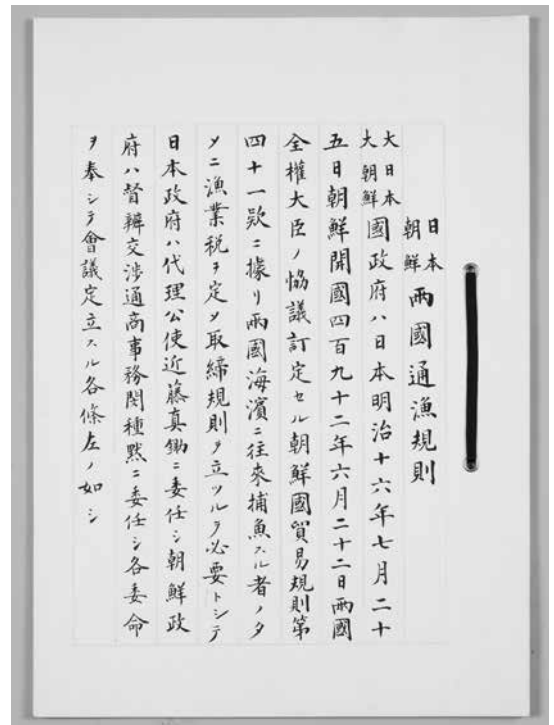


写真3 日本朝鮮両国通漁規則 複製 1889年
本館蔵(原品：外務省外交史料館蔵)

ため、朝鮮の陸地に大きく依存するものではなかったと考えられる。しかし、「貿易規則」で緊急避難や水や食料等の必需品の補給のための一時的な入港(第30款)、あるいは現地での漁獲の販売(第41款)が公式に認められ、さらに漁獲対象の拡大や漁法の多様化で陸地での作業が必要になると、日本漁民と地元朝鮮の住民との接触の機会が増え、軋轢が生じるようになる。済州島では、日本漁民の器械潜水漁によるナマコやアワビの乱獲が最終的には殺傷事件にまで発展している。

こうした状況は外交問題ともなり、日本の水産界でも大いに問題視された。殺傷事件とまではならずとも、揮ひとつで女性の前を闊歩することは儒教社会の朝鮮では許されることではなかったし、鶏や豚を盗むような輩もいた。ただし、日本の漁民のすべてがそのようなふるまいをしていたわけではなく、地元住民との良好な関係も模索された。



写真4 愛媛県越智郡魚島村韓国出漁之状況 複製 1907年 本館蔵(原品：個人蔵)

愛媛県越智郡の離島、魚島では1890年代に慶尚南道巨済島への出漁がはじまった(写真4)。目的はカタクチイワシの漁獲と煮干への加工で、当初はカタクチイワシを煮るための加工場の設置や天日干しするための土地の使用が地元住民との衝突を生んだ。魚島の漁民は1907(明治40)年に8戸が巨済島の旧助羅(クジョラ)に移住したとされるが、その2年後の1909年には地元住民にあてた一種の誓約書を作成している。この誓約書には次の5項目がかかげられ、魚島漁民8人の名が記されている。

- 一 道では婦人を辱めるような言動を慎むこと
- 一 漁業を介して互いに商売をすること
- 一 服を脱いで村の前を歩かないこと
- 一 日本人と韓国人が互いに争わないこと
- 一 牛や犬を傷つけないこと

魚島の漁民8名はおそらく船主層であり、その下には幾人もの漁師がいて、なかには粗野にふるまう者もいたであろう。しかし、それを許しては異郷の地で漁業を営むことはできない。そうした

現実的な考えを持つ漁民もいたということである。

その後、こうした対立は韓国の保護国化や併合などによって、表面的には見えにくくなっていく。

おわりに一なぜ漁民は朝鮮をめざしたのか？

一般的に朝鮮半島沿岸への出漁を担ったのは、利用できる漁場の狭い零細な漁民であったと考えられている。日本の漁場で貧しさに苦しんでいた漁民が、資源が豊富で外交的な立場の弱い朝鮮の漁場に活路を見出した、というのである。たしかに、地元の海で漁をして豊かな暮らしを送れていれば、朝鮮まで出漁する必要はなかったかもしれない。また、領事裁判権等に守られながら朝鮮で漁をしていたことも確かである。しかし、もう一步踏み込んで考えてみると、ほかにもさまざまな理由が想定できそうである。

まず、漁民はそもそも移動性の高い人びとであるということである。近世の瀬戸内漁民の対馬への出漁の例からもわかるように、漁民は条件さえ整えば遠方まで出漁することをいとわない。そして、その対馬の先には朝鮮がくっきりと見えており、環境が日本と近く、求める海の資源が豊富な海域であることも経験的に知っている。明治に入り、海外渡航の禁が解かれたと同時に朝鮮への出漁がはじまったのも自然なことであろう。

また、朝鮮は日本と比して海の資源に対する関心が薄い傾向にあったことも重要である。もちろん朝鮮でも海産物は大いに利用されたが、儒教を柱とした身分制社会における漁民の立場は低く、積極的に海とかかわり続けることの利点はそれほど大きくなかったと考えられる。そこに日本の漁民が機会を見出したという点も重要である。

【主要参考文献】

長節子2002『中世国境地域の倭と朝鮮』吉川弘文館

木部和昭2003「近世対馬沿海の漁業と越境行為一朝鮮海密漁と対馬藩の西目弄規則一」『山口経済学雑誌』51-2、山口大学経済学会

松田睦彦2020「明治16年『貿易規則』以前の朝鮮海出漁一前史としての対馬出漁とその意味一」『国立歴史民俗博物館研究報告』221、国立歴史民俗博物館

松田睦彦2021「名もなき人々の小さな日朝関係史一瀬戸内漁民の朝鮮海出漁一」『REKIHAKU』2、国立歴史民俗博物館

松田睦彦2023「外交文書に見る朝鮮海通漁の成立一貿易規則から通漁規則へ一」『国立歴史民俗博物館研究報告』239、国立歴史民俗博物館

吉田敬市1954『朝鮮水産開発史』朝水会

〈帝国〉日本の修学旅行

樋浦 郷子(国立歴史民俗博物館)

はじめに 中等教育機関がけん引した修学旅行

日本国内から海外や植民地化した地域へと修学旅行へ行くことは、「外地」修学旅行(以下煩を避け「」省略)や「鮮満」修学旅行などと呼ばれた。何をもって外地修学旅行と判断するか諸説あるものの、例えば1896年に長崎商業学校が上海に旅行、1902年の福岡市商業学校が当時の大韓帝国に「行商旅行」に出かけた事例などそのきわめて早い事例である¹。日露戦争後には、陸軍の支援もあり旅順や奉天(瀋陽)への男子生徒による戦跡めぐりが増加する。戦跡めぐりに加え、次第にハルビンや撫順炭鉱が訪問地として組み込まれるようになった。

1899年から開始された鉄道の修学旅行割引、1912年に国主導のジャパンツーリストビューローが創設され、ほかにも民間旅行会社ができ、観光ブームや消費文化の広まりを背景に、1920年代以降は外地修学旅行が男子の中高等教育機関(内地では中学校、実業学校、師範学校)を中心に広く実施されるようになった²。

本コメントでは、こうした時代状況に触れたのち、新たな研究課題として朝鮮から内地への修学旅行、満洲(中国東北部)から朝鮮への修学旅行について紹介し、若干の検討を行う。

1. 修学旅行への規制

外地修学旅行は1920年代から30年代にかけて隆盛したが、それ以前から修学旅行に対しては、観光旅行化することや旅先でのトラブル、保護者の負担に、各府県や学校ではたびたび通牒や規程を定めて抑え込もうとする動きがあった。

例えば、1901年、青森県では早くも修学旅行は中学校4年生と5年生、年1回3泊以内と定め、1913年には群馬県立沼田中学校の「修学旅行規定」で「京都、大阪、奈良、伊勢方面では伊勢神宮と伏見桃山陵「必ズコレヲ行フベシ」」として、関西方面の場合には皇祖を祀る伊勢神宮や天皇陵への訪問を義務づけ、天皇崇敬の心を涵養するという教育上の目的を明らかにしている³。青森県では1926年に修学旅行の基準を見直し、中学校では宿泊を伴う修学旅行を最終学年に限るとした⁴。

しかし学校ツーリズムの隆盛はとどまることなく、20年代にはますます修学旅行は盛んになり、外地修学旅行も広く普及するに至る。それでも、1926年には山梨県で中学校等は7泊8日以内、小学校は事前認可制にするなど基準見直し、1929年には新潟県で「修学旅行ニ関スル件通牒」により、県外では伊勢のみ認め県内旅行で「経費節減」⁵することと学校への自戒を求めるなど、規制する側とさ

1 山本志乃『団体旅行の文化史 旅の大衆化とその系譜』、創元社、2021年。『修学旅行のすべて』23巻、2004年、138頁。

2 女子教育機関としては、大阪府女子師範学校が1938年に「鮮満」旅行を実施、奈良高等女子師範学校が1939年に同様に実施したことが校内の記録に残されている。

3 前掲山本、146頁

4 前掲『修学旅行のすべて』、138頁。宿泊をとまなう場合は男子に限られた。

5 同上、142頁。

れる側のいちごが継続されていた。

2. 在朝日本人の内地修学旅行 朝鮮から内地へ

以下では、上述のような「内地から外地へ」の修学旅行の隆盛とは異なる、「朝鮮から内地へ」「満洲国から朝鮮へ」といった修学旅行について述べる。

写真1は、1937年に実施された平壤公立高等女学校(主に在朝日本人が在学する学校)の卒業アルバムに記録される修学旅行の写真である。

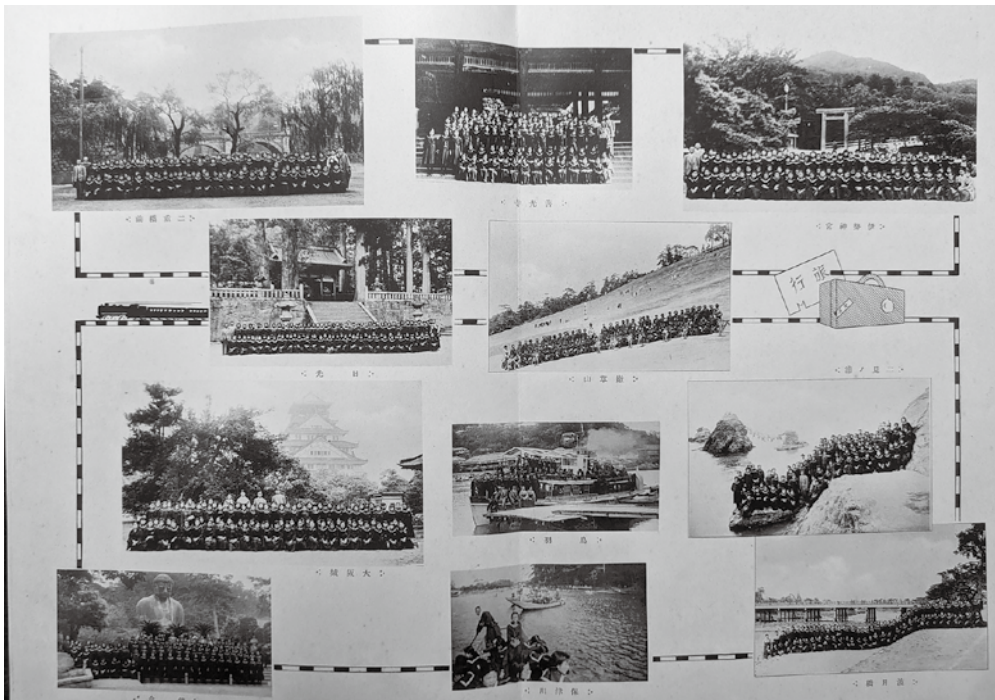


写真1 平壤公立高等女学校 「第23回卒業記念帖」 1938年

写真左上から、「伊勢神宮、善光寺、二重橋前、日光、嫩(若)草山、二見ノ浦、鳥羽、大阪城、鎌倉、保津川、渡月橋」を訪問したことがわかる。ここで同時期、京城女子師範学校に在学していた杉山とみの証言⁶に耳を傾けてみたい。

杉山は、京城女子師範学校に在学中、1938年に内地修学旅行を、翌年満洲修学旅行を経験した。大邱で生まれ育った杉山にとっての初めての日本訪問は、生涯強く心に刻印されていた。次のように晩年回想している。

- ・浅草の国際劇場で少女歌劇を見た
- ・京都新京極の「ミマツ」喫茶店の美しい女性

6 杉山とみ(1921～2024)は、大邱に生まれた在朝日本人2世。京城女子師範学校卒業後、大邱で小学校(朝鮮人対象)教員となる。引き揚げ後は富山に在住、教員時代に、朝鮮の小学校から女子挺身隊(不二越)を送出しこと、日本語教育を行ったことなどを後悔し、証言を続けた。発表者は2007年に杉山へのインタビューに2度参加し、記録は次にまとめられた。駒込武編「杉山とみさんインタビュー記録」財団法人京都大学教育研究振興財団「平成19年度学術研究活動推進助成」報告書『植民地期朝鮮における日本人社会の研究－聞き取りと回想録によるライフコース分析－』、(抜粋)2008年6月。

- ・銀座に行くため事前に寄宿舍で「歩き方練習」をした
- ・学校の寮では「華嚴の滝ごっこ」が流行していたところ、日光で本物の華嚴の滝を見た

これらから、コースはほぼ上の平壤公立高等女学校と同じであったことが推定される。同時期の国内の女子教育機関の修学旅行と比べると、長期、かつより広範囲であったといえる。とくに、内地の学校の修学旅行では、それ以前の段階で日光を訪問する事例が多かったためだろうか、日光が除かれるのに対し、朝鮮からの旅行は二校ともに日光が組み込まれている。一つの地域での滞在は短くなったとしても、多くの生徒にとって初めての日本を1カ所でも多く訪問して学生に見せる意図があったと思われる。

対する生徒側は、杉山へのインタビューによれば、旅行で体験したものの記憶は「敬神」「必ず伊勢に」などの官庁の通牒等の意図とは異なることが鮮明にわかる。

3. 中国東北部から朝鮮へ

写真2は、「満洲国」の間島(現在の中国吉林省延辺朝鮮族自治州)にあった朝鮮人対象中学校の卒業アルバムに掲載された1940年頃の修学旅行のコースである。「満洲」から見る日本は、伊勢神宮ではなく「京城(ソウル)」であった。地図で日本国旗が「京城」にだけ描かれているのは象徴的である。ハルビンには満洲国旗が描き込まれる。朝鮮人生徒に祖先の地を見せアイデンティティを育成しつつ、満洲国の実情を知ることが重視されたようである。

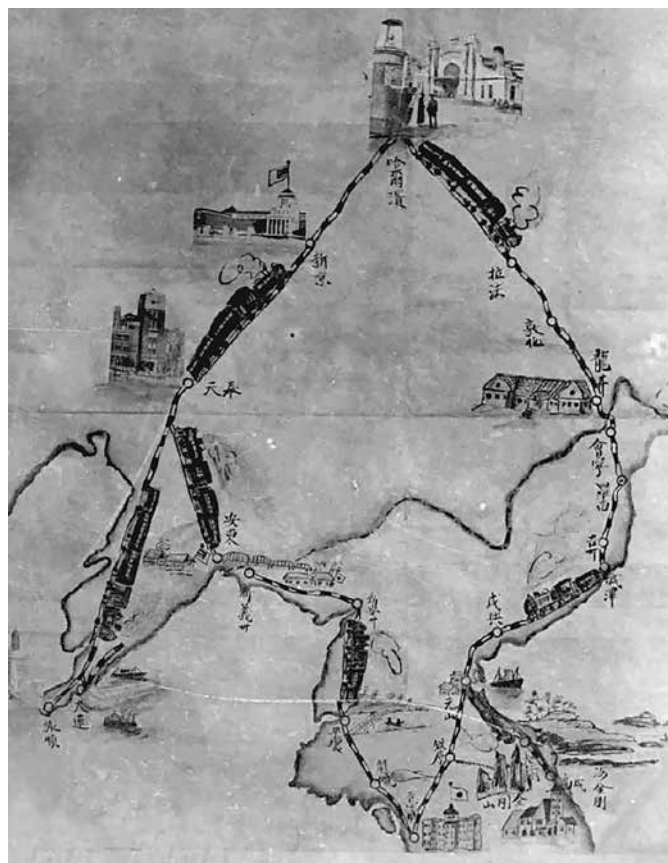


写真2 間島地域の国民高級中学卒業アルバム、1940年ころ
出典：『80年前の修学旅行（韓国語）』戸田郁子編／図書出版 土香
（トヒヤン）2019年

4 伊勢神宮へ

1930年代半ば以降になると、戦況の悪化で安全な旅行が難しくなるなか、「神社への勤労奉仕」を目

的(大義名分)に長距離修学旅行1940年代初頭まで継続された。

実際に、伊勢への「教育的な」旅行は、小学校の修学旅行でも実施され、東京府は伊勢参宮旅行に補助を行うなど、1930年代にはきわめて多くの児童・生徒の旅行地となった。1939(昭和14)年の統計では、小学生だけで、台湾から1015人、朝鮮から1510人の修学旅行生が伊勢神宮(内宮)を訪問した⁷。

表 1939年伊勢神宮訪問「小学校」校数と人数(永江2009に基づき作成)

	内宮		外宮	
台湾から	20校	1015人	46校	697人
朝鮮から	300校	1510人	281校	1416人

この数字は小学校に限られていることを思えば、1939年に至っても、少なくとも「外地」から伊勢への修学旅行は著しくさかんだったと考えられる。

おわりに

杉山とみの経験した内地修学旅行では、強く記憶されていたのは浅草にあった国際劇場の少女歌劇、京都新京極の喫茶店など都市のモダンさであった。「満洲」から朝鮮への修学旅行では具体的証言は得られていないものの、京城で都市のモダンな建造物をみたことを除けば、朝鮮内では、イラストから想像するほかないが、伝統的な朝鮮の建築物や風景を見学し、次にハルビンでモダンさに加え国際性を体感し間島へと戻った。朝鮮の外で育った朝鮮人にアイデンティティを感じさせ、日本の外で育った日本人生徒にアイデンティティを感じさせる役割を担った。それは、官庁の思惑とは懸隔を持ち、かつそれぞれに異なるアイデンティティであったことだろう。

京城女子師範学校には少数ながら朝鮮人女子学生が在学していた。残念ながら朝鮮人女子学生の感想については他日の課題とせざるを得ないものの、杉山とみは同級生の朝鮮人学生のなかに、教育勅語暗記の宿題をしてこなかった学生がいて、その学生が堂々と反論して驚いた経験を証言している⁸。彼女らの日本内地経験は、さらに異なる経験であったことだろう。

修学旅行という、遠足(行軍)から生まれた日本の学校文化は、朝鮮生まれの女子生徒が初めて内地を経験する機会、中国東北部朝鮮民族の男子生徒が、朝鮮を体感する機会ともなり、それぞれに為政者の思惑とは異なる体験をはからずも提供したと考えられる。

【引用以外の参考文献】

梅野正信 編著 『校友会雑誌にみる「帝国日本」「植民地」「アジア認識』、静岡学術出版、2020年。

財団法人全国修学旅行研究協会『修学旅行総覧－新しい修学旅行』、1997年。

曾山毅「日本統治期台湾における修学旅行の展開－『台湾日日新報』を中心に」『観光学評論』vol.1-2、観光学術学会、2013年。

鉄道博物館『鉄道の作った日本の旅150年』、2022年。

7 永江由紀子「大正末一昭和戦前期における小学校児童の修学旅行に関する研究－集団形成の論理に注目して－」『旅の文化研究所研究報告』18号、旅の文化研究所、2009年12月、5頁。

8 「あの海の向こうに～植民地で教えた先生～②」、朝日新聞、2021年8月16日17:00有料配信記事。

平岡ダムの建設と満島捕虜収容所―地域史の観点から

原 英章(飯田市歴史研究所)

はじめに

長野県最南端に位置する天龍村は、人口958人(2025年)、高齢化率は約60%で日本の市町村の中で3番目に高い山村である。この村には、今も発電を続けている平岡ダムが戦時中に国策事業として建設された歴史がある。建設工事には、日本人のほかに、朝鮮人、連合軍捕虜、中国人が強制労働をさせられ、多くの犠牲者が出た。



現在の平岡ダム(撮影：原英章)

戦後の横浜裁判で、満島捕虜収容所の職員が厳しく裁かれ、その中に地元民がいたことが天龍村に暗い影を落としていた。しかし、2000年に発行された『天龍村史』には平岡ダム建設の歴史が詳述され、戦争の頃の歴史も村の歴史としてありのまに受けとめようとする動きが始まった。同じころ、元英国捕虜が収容所時代の日記を天龍村に寄付したことが契機となって、その日記を読んだ中学生が元捕虜の招きを受けてイギリスを訪問し、それが恒例化して、中学生の多くがイギリス訪問をすることになっていくことに発展していった。



出典：梁泰昊編『朝鮮人強制連行論文集成』(明石書店、1993年)をもとに作成

このように、戦争による互いの怨念を乗り越え、国境を越えた交流が村の支援もあって中学生と元捕虜の間でなされ、中学生による「収容所があった村」からの平和の発信が志向されたことは注目に値し貴重な試みであったといえる。天龍村の事例から、捕虜収容所のあった村の歴史の受けとめについてみていきたい。

1. 平岡ダムの建設工事と外国人等の強制労働

平岡ダムは、天龍村平岡地籍に、水量豊かな天竜川をせき止めて造られた発電用のダムである。国策会社であった日本発送電の計画を熊谷組が請け負い1940(昭和15)年に着工、途中戦争による資材不足のための中断を経て、戦後の1952年に完成した。

1941年末にアジア太平洋戦争が始まると、名古屋方面の軍需工場への電力供給としての平岡ダムの工事は強い国家要請のもとに進められた。戦争中の労働力不足を補うため熊谷組は着工当時より雇っていた朝鮮人労働者数

表1 平岡ダム建設工事の外国人等の総数と犠牲者数

	総労働者数	犠牲者数
朝鮮人	2300人	34人
連合軍捕虜	常時200~300	59人
中国人	884人	62人

を増やすとともに、1942年からは連合軍捕虜を、さらに1944年には中国人労働者をダム工事に従事させた。その総数は、朝鮮人2300人、連合軍捕虜は常時200～300人、また中国人884人であった。このように朝鮮人、連合軍捕虜、中国人といった多数の外国人等による強制労働によって基礎工事が行われたところに平岡ダム建設の特色がある。

これら強制労働させられた人々は、いずれも自由を奪われた上に、劣悪な食事・住環境に加え苛酷な労働によって多くの犠牲者が出た。その数は朝鮮人34人、連合軍捕虜59人、中国人62人であった。(表1参照)

2. 満島捕虜収容所と戦後の横浜裁判

連合軍捕虜は、1942年に、戦後天龍中学校校庭となった平地に設置された満島捕虜収容所に収容され、そこから工事現場へ通って基礎工事に従事させられた。

捕虜たちは、収容所職員による日常的な暴力を受けただけでなく、空腹から食料を盗んだ者に対する制裁による死者も出た。また59人という直江津収容所に次ぐ犠牲者数の多さもあって戦後の横浜裁判では、捕虜虐待の罪によって初代所長の中島裕雄大尉を含め6人が絞首刑、4人が無期懲役、1人が懲役25年という厳しい判決が下された。死刑の中には天龍村出身の職員も一人含まれていた。このことが戦後天龍村のなかに戦時中のダム建設についての話はタブーとするような雰囲気醸成されていった。

3. 戦後の中国人犠牲者慰霊と遺骨送還運動

戦後、平岡ダム建設に強制労働させられた外国人犠牲者に対する慰霊の動きは中国人の犠牲者の遺骨収集、遺骨送還から始まった。満洲移民として満洲へ渡り、シベリアでの抑留を経て帰国した山本慈昭らは、全国的な中国人犠牲者遺骨送還運動の一環として、平岡ダム工事で亡くなった外国人等を火葬した火葬場跡から出土した遺骨を中国へ送り届けるとともに、ダムの傍らに「中国人犠牲者慰霊碑」を建立した。(火葬場で火葬されたのは、中国人だけでなく朝鮮人、連合軍捕虜も火葬されていたが、当時そのことは問題にはならなかった。)現在も5年ごとに中国人犠牲者の慰霊祭が慰霊碑の前で行われている。平岡ダム工事で強制労働させられた外国人等のなかで、食料も貧弱で最も苛酷な状況に置かれていた中国人労働者は、1945年5月の工事中止に伴って、北海道や岐阜県の作業場へ移動され終戦時には平岡には一人も残っていなかった。加えて、戦後の横浜裁判では、満島捕虜収容所職員が厳しく裁かれたが、多くの犠牲者が出た中国人収容所の関係者(地元天龍村の住民が関わるが多かった)への追及はされなかったこともあり、中国人労働者に対する住民の意識は連合軍捕虜への意識とは異なり、同情的、友好的であったと言える。実際、平岡ダム工事に強制連行されてきていた中国人がダム完成後の天龍村を訪れたり、また村長らが中国の関係者を訪問したこともあった。



中国人犠牲者慰霊碑(撮影：原英章)

4. 『天龍村史』の刊行と連合軍捕虜鎮魂碑の建立

連合軍捕虜への天龍村住民の意識が変化するきっかけとなったのは、2000年に発行された『天龍村

史』に平岡ダム建設史が詳述されたことがあると思われる。

『天龍村史』は当初村在住の郷土史家らが中心になって編集を進めていた。その当時に村史編纂室を訪問した筆者が、平岡ダム建設に関わった外国人の記述について尋ねたところ、編集担当者から「平岡ダム建設の外国人強制労働については、村民感情があって触れられない」という返答があったことを記憶している。しかし、隣村出身の明治大学教授後藤総一郎を村史編纂の監修者に迎えることによって、平岡ダム建設の



連合軍捕虜犠牲者鎮魂碑(撮影：原英章)

歴史が詳述されることになった。後藤は院生やゼミの学生とともに平岡ダム建設の歴史を調査し、『村史』の一章を「平岡ダム建設史」として54ページにわたって詳述した。(明治大学後藤ゼミの学生たちの論文集『戦争の傷痕―満島捕虜収容所の歴史像―』という論文集も編まれている。)

『天龍村史』の発行によって、今まで口頭で語られていたことが文字化され、天龍村在住で死刑になった収容所職員のことやその家族のたどった苦難のあゆみも記された。そうした中、『天龍村史』発刊の年に捕虜収容所跡の傍らに「満島俘虜収容所犠牲者鎮魂碑」が村民有志によって建立された。碑文には「この鎮魂碑は2000年を節目とした『天龍村史』の発行にあたって」と、『天龍村史』発行が鎮魂碑建立の契機であったことが明記されている。同じころ元イギリス人捕虜であったローズの日記が天龍村へ寄附された。

5. ウイリアム・ローズの日記寄贈と天龍中生徒のイギリス訪問

ウイリアム・ローズは1912年生まれ、元英国空軍軍曹、ジャワ島で日本軍の捕虜となった後1942年11月～1944年4月まで満島捕虜収容所に収容され、戦後無事にイギリスに帰国した。1999年に天龍村を訪問したローズは、捕虜時代に欠かさず書いていた日記(コピー)を天龍村に寄贈した。これを報じた当時の地元新聞には、天龍村の秦村長へのインタビューが掲載されている。

「平岡ダムの外国人強制労働をとり上げることは数年前までタブー視されてきたが、最近になって『戦争の時代も村の歴史の一部であり、事実をありのままに掘り起こすべき』(秦村長)との考え方から前向きな調査・研究が始まっている。ローズさんの来村に秦村長は『村の歴史を記録していくうえで大変ありがたい。村民の資料を村誌に残すなど歴史教育にも生かしていく』と語っていた」(『信州日報』1999・10・14)。ローズは、2002、2004年にも天龍村を訪問している。

一方、天龍中学校では、2002年から「選択社会科」で、ローズの日記翻訳の学習をしていた中学生たちが、ローズに手紙を書いたりして交流していた。天龍村の「中学生模擬議会」で、一人の女子生徒が村長にイギリス訪問を訴えたことがきっかけとなって、今までアメリカやカナダへ行っていた中学生の海外研修の目的地を、英国にしてローズを訪ねる研修にするという提案が、村で取り上げられることとなった。これには村教育委員会に勤務し中学で「選択社会」等を担当していたカナダ人 アンダーソン・トレバーの働きかけもあった。村が費用の一定額を補助する形で英国訪問が開始された。

最初のイギリス訪問は、当初予定されていた2003年3月出発がイラク戦争のため延期となり、同年8月に高校生になった2人がアンダーソン引率の下に訪英した。

翌2004年には、中学2年生15人が3月に春休みを利用して英国訪問したのに続いて2008年3月まで6回にわたって訪問している。その後ローズが逝去したこともあり、2009年以後中学生の海外訪問は、英国からグアム島へ目的地が変更され現在も続いている。

6. 中学生の英国訪問の様子

中学生たちはローズの住んでいるカンタベリー市近郊の村に行き1週間～10日間滞在して、ローズに戦争中の体験を聞いたり、帝国戦争博物館に寄贈されているローズの日記原本を見たりするなどの平和学習の他に、ホームステイをして英語の学習や国際理解の学習も行った。中学生たちはイギリスでも大きな歓迎を受け国際親善の役割も果たして来た。時のブレア首相の知る所となり、ブレア首相が「日本とのよい親善になる」とカンタベリー市長あてに手紙を送ったこともあった。中学生たちのカンタベリー教会訪問には市長も参加するなど現地での歓迎も大きかった。

記録に残されているローズへの質問と回答(一部)

Q：日本に連れて来られてひどい目にあったのにそれでも日本と関係を持ってくれているのはなぜですか？

A：良いことと悪いことのバランスを自分なりに使ってこられたからではないだろうか。

Q：何を励みにがんばっていたのですか？

A：「生きて帰るんだ」という気持ちで仕事になれて体力をつけてがんばった。また、出されたもの(食べられるもの)は何でも食べた。



2003年 最初に英国訪問した高校生2人を紹介する地元新聞

7. 中学生たちの受けとめ

このようなイギリス訪問をした生徒たちの受けとめについて紹介してみる。2004年3月にイギリス訪問をした生徒たちが「PEACE—天龍—」というグループを結成し、同年8月に開催された飯田市歴史研究所地域史研究集会で発表している。

「(前略)私達はイギリス訪問を機会にあらためて平和の大切さを感じました。私たちは戦争を知りません。だから私達は戦争の恐ろしさを色々な人達と話し合わなければいけません。天龍村が平和と友好の架け橋になることです。更に中国や朝鮮からの強制労働のあった収容所の村の歴史を学習していきたいと思います。天龍村も戦争の犠牲者だと考えます。だからそれに目をそむけることなく平和で安心して暮せる地にしていかなければなりません。(中略)平和を守ることが私達の役割なんだ、そのためには地域の歴史を正しく見つめるために、多くの人から資料を集めて平和について仲間とともに考

えていきたいと思います。」
(『飯田市歴史研究所年報』第3号、2005年)

また、この年訪問した中学生2人が中心となって発行した新聞「PEACE～平和～」には「平和の使者、イギリスへ」という大きな見出しが掲げられ、紙面からも自ら「平和の使者」との自覚を持っていた中学生たちの心意気が伝わってくる。(写真参照)

なお、平岡ダム工事に携

わっていた朝鮮人については、犠牲者が出ているにもかかわらず慰霊碑もなく、忘れられたようになっている。その要因として、「官斡旋」等の強制動員されて来た人々の大部分は戦争直後に帰国したものの、自主渡航で来日した人々を中心に戦後この地に残った人たちもあり、戦後の韓国と北朝鮮の分裂に伴い、在日朝鮮人・韓国人組織が2つに分かれたり、また一方では帰化する人達もいて複雑な様相があることなどが影響していると思われる。

表2 天龍中学校の英国訪問のあゆみ

年	英国訪問した中学生数	期 間	備 考
2003年	2人	8/5～13	3月はイラク戦争のため延期となり8月に高校生となった2人が訪問
2004年	15人	3/19～29	中学2年生
2005年	10人		//
2006年	6人		//
2007年	4人		//
2008年	8人	3/24～30	//



中学生たちが作成した新聞、2004年9月

ご案内

【展示のご案内】

- ・第3展示室特集展示「生田コレクション 鼓胴」
2025年7月23日(水)～8月31日(日)
- ・企画展示「野村正治郎とジャポニスムの時代―着物を世界に広げた人物」
2025年10月28日(火)～12月21日(日)
- ・第3展示室特集展示「野村正治郎の後継者―賤男の活動」
2025年10月28日(火)～12月21日(日)

【催事のご案内】※聴講無料 場所：国立歴史民俗博物館 講堂

- ・第462回歴博講演会「中世寺院の経済学―信仰・院家・地域社会―」
2025年9月13日(土)13:00～15:00
講師：小野塚 航一(国立歴史民俗博物館・研究部・特任准教授)
- ・第122回歴博フォーラム「様々な「死」から社会をよむ」
2025年9月21日(日)10:00～17:00
講師：上野 祥史(国立歴史民俗博物館・考古研究系・准教授) 他
- ・第463回歴博講演会「幕末維新期の国際関係と徳川外交の模索」
2025年10月11日(土)13:00～15:00
講師：福岡 万里子(国立歴史民俗博物館・歴史研究系・准教授)
- ・第464回歴博講演会「とある着物コレクターの生涯―野村正治郎の足跡」
2025年11月8日(土)13:00～15:00
講師：澤田 和人(国立歴史民俗博物館・情報資料研究系・准教授)

表紙上・愛媛県越智郡魚島村韓国出漁之状況(複製)原品：個人蔵 表紙左下・パーリンゲーム使節団(1868年)／Library of Congress 表紙右下・大隈重信らと清国留学生(1909年6月)／早稲田大学歴史館蔵
P3左・平岡ダム P3右・釜山第二公立商業学校アルバム1940／個人蔵
裏表紙・東京に到着した台湾議會設置請願団(第6次)代表を歓迎する台湾人留学生(1925年2月)／中央研究院台湾史研究所檔案館蔵

【歴博の情報発信】

国立歴史民俗博物館の企画展示・特集展示・フォーラム・講演会等の情報は、ウェブサイト・X(旧Twitter)・YouTube・ニューズレター(メルマガ)でもご案内しています。

- ウェブサイト <https://www.rekihaku.ac.jp>
- X(旧Twitter) @rekihaku
- YouTube <https://www.youtube.com/@NMJH>
- ニューズレター ウェブサイトのトップ画面に「歴博とは」のアイコンがあり、そこから下へスクロールすると登録画面に進めます。

第121回歴博フォーラム 境界を往来した人びと

発行日 2025年8月2日
編集・発行 国立歴史民俗博物館
〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117
Tel.043-486-0123(代)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History

ISBN 978-4-909293-27-5

